
夢想花

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想花

【Zコード】

N6705Y

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

日本から宋の国にとばされ、国の重鎮のもとで生活していた神崎鈴音。ある日、彼女を訪ねてきた国の王太子の願いとは、彼女が正妃候補として王太子宮で暮らして欲しいといつもので・・・？

プロローグ

「こは宋の国。私の名前は神崎 鈴音^{かんざき すずね} 18歳。日本の女子大生をしていた。専攻は幼児教育。いずれ幼稚園の先生になりたいと思っていたものだ。しかし、現実はそうではなく宋の国にトリップしてしまい困り果てていた私を、宋の国の重鎮である、李 齊蓮^{り さいれん}様に保護され、養女にしてもらつた。齊蓮様は優しく、温厚なお方で、本当の父のように思つてゐる。

「鈴音様。旦那様がお呼びにござります。『足労いただけますでしょうか?』

「ええ、ありがとうございます、琉香。それでは、支度をしなくちゃね。お願ひできるかしら?」

かしこました、と琉香は私の支度をしていく。ここでは、養女の私も当主である齊蓮様にお会いするには略式の服装にならなくてはいけない。私のお世話係は何人かの侍女がいるが、筆頭は琉香だ。彼女は私と年も近く、いつも付き従う筆頭の侍女だ。今日もいつものごとく衣装を選び、丹念^{たんねん}に化粧を施し、琉香の先導のもといつものように、齊蓮様のお部屋へ向かう。よく話すことが多いけど、こんな朝早くからお呼びなんて珍しい。なにか、あつたのだろうか?

「琉香。朝早くのお呼び出しのこと、何か聞いている?」

「それは、旦那様自らご説明されるやつですわ。お早いいきましょ

う

「わ、わかつてます。まだ、衣装の裾が長いのに慣れないんだもの。

・・・

略式の衣装といえど、上質の布が使われている。この国の女性なら

普段着なのだらうけど、私にしてみたら普段着からおしゃれ着に入るけどなあ。そうこうしているうちに、齊蓮様のお部屋についた。先触れの琉香が、伺いのノックをする。内からどうぞ、と声がかかりゆつくりと扉が開かれる。眩しい光の中、齊蓮様と・・・もう一人、若い男・・・?

「失礼します。鈴音様をお連れ致しました」

「ご苦労、琉香。さがつてくれ。あとでまた呼ぶから」

「承知いたしました。何かありましたら、お呼びくださいませ。失礼いたします」

そういうたやり取りの後、琉香は下がり、部屋には齊蓮様と私と、若くて気品のある男の3人に。みるからに威厳のある顔立ちや雰囲気だけ、今までに見たことないけどなあ・・・?一応、淑女の礼をとり挨拶をする。

「お初にお目にかかります。李齊蓮が養女、鈴音」といります。

本日はお越しいただき誠に恐縮でござります」

「いや、急にきたのはこちらの方だ。朝早くにすまないな、齊蓮、

鈴音」

「いいえ、我が君。行啓^{ぎょうけい}いただき、感極まつてござります。本来なら、こちらから行かねばならぬところを・・・」

深々と我が君、と呼んだ方に臣下から君主にする最高礼をしてるのを見て、目の前の男が高貴なる身分であることがわかる。行啓、といふのは王妃・王太后・王太子。王太子妃が外出することをいう。行啓が王が外 出することをさすみたいだ。詳しくはわからないけれど。。

「鈴音。こちらのお方は、この国の王太子、緋紫蘭様。御年20

歳であらせられる。

御存じだね？」

「はい。もちろんに『ござります』。それで、私がよばれたのにはどの
ような理由が『ござこましょうか？』

「それは、私が申そう。鈴音、そなたに頼みたいことがある」

「頼みたいこと、に『ござりますか・・・・・？』

やんごとなき身分のお方が、重鎮の屋敷にきて、そこの養女に頼み
ごと・・・？いつたいどんな頼みごとなんだ。なんか、想像つくけ
ど、なんか聞きたくないような・・・

「そうだ。そなたに、しばらく王太子宮で暮らしてもらいたいのだ
「・・・聞いてもよろしく『ございますか？』

「堅苦しいのはよせ。そなたも、言葉遣いに慣れぬ様子。ぐだけた
物言いでかまわん」

「なんでわかった、と言いたいが相手は偉い身分の人。くわえて、養
父は国の重鎮で私を保護してくれた人。くだけていっていっく
れてるんだ、それでいいじゃないか。

「では、失礼して。どうして、そんな大事なことを私に？もっと、
ふさわしい人とかいないんですか？」

「頼みたくとも、腹のわからぬやつばかりでな。齊蓮が保護してい
る女性がいるときいて、人柄などを日々聞くうちに、そなたならと
判断した。国の重鎮たる齊蓮の養女たる鈴音に、王太子宮で暮らし
てもらう。もちろん、正妃候補としてだ。よろしく頼む」

よろしく頼む、つて拒否権は・・・ないわよねー。あつたら、こ
んな朝早くからよばれないはずだ。仕方ない、齊蓮様に迷惑はかけ
れない。暮らすだけならいいわよ、暮らすだけなら。候補なら、あ

とで理由つけて帰れるだろうし。そう思っていた私の考えが大きく
覆されることはこのときは思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

初書きです。応援よろしくお願いします

1・王太子宮へ

先日、宋の國の王太子である 紫蘭様がござられて正妃候補としてあがつてほしいといわれて紫蘭が帰ると、すぐに家令の 江來を始め、使用人たちが主である李 齊蓮の名に恥じぬよう、とぬかりなく輿入れの準備をしていく。他に何か言われるようなことがあつてはならない。慌ただしく数日がすぎ、輿入れの日となつた。

「鈴音様、本日のめでたき日を迎えたこと、我ら心よりお祝い申し上げます」

「ありがとうございます、江來さん。皆さんも、短い間ですが、お世話になりました」

「ありがとうございましたお言葉、しかと頂戴いたしました。琉香をお連れください。王太子宮へそば仕えの者をひとり連れてよいと、お達しがありましたので」

琉香が前に進み出て嬉しそうに微笑む。よかつた、彼女にはついてきてもらえたらと思つていたし。見ず知らずの世界で、親しいといえるのは養父である齊蓮と琉香だけなのだ。婚礼の行列は厳かに、王太子宮へと出発したのだった。長い行列にほう、とため息がもれる。

(日本の花嫁行列みたい・・・おばあちゃんが、言つてたつ。すぐ長い列だつたんだつて)

鈴音はそんなことを聞いているだけで見たわけではない。しかし、それを彷彿とさせるものが、婚礼の行列にはあつた。流れゆく景色の中で、前方にひときわ大きい建物が見えてきた。きっと、あれが王宮なんだろう。

「もうすぐですよ、鈴音様。つべ頃には紫蘭様とお会いできると思
いますわ」

「そうね。……」「しても、この花嫁衣裳、派手すぎないかしら？」

「こんなもの？」

「ええ。紅の衣装はお気に召しませんか？よくお似合いですよ。あ
あ、降りるときには裾を私が後ろよりたくし上げますから、」安心
くださいませ」

につゝりと微笑まれて、う、と面葉につまってしまふ。元々、おとな
しい性格の鈴音だ。やさしく言われるといやとは言えない。そう
こつしているうちに、行列は王太子宮へとついたようだ。鈴音たち
が乗る軒がゆつくりと、止まる。落ち着いてそつと降りる。後ろ
はまかせて大丈夫だ。

「よつゝや、鈴音様。我ら一同、今日この日を心よつお祝い申し上
げます」

一糸乱れぬ呼吸で王太子宮へ仕える者たちが跪く。最高礼をもつて
迎えられた。緊張のあまり言葉につまつそうになるが、口上をのべ
る。

「ありがとうござります。今日よつお世話をなる季 鈴音にござりま
す。よろしく」

「鈴音！ 来たか、待ちわびていたぞ！」

「わやつ」

体が軽くなつた、と思つたら突然現れた紫蘭に抱きあげられていた。
正装に包まれた紫蘭はいつもより色氣があり、はにかんだ笑顔に一
瞬、どきつとした。顔に朱がはしるのがわかる。

「び、びっくりするじゃありませんか、紫蘭様」

「紫蘭でいい。私たちはこれから毎日、顔をあわせるのだから。ああ、今までお前という存在を知らずにいた日々はなんともつたいないことが。だが、今日からは違う。私は鈴音といつ至宝を手に入れただのだから」

「し、紫蘭様・・・・・」

「紫蘭でいいと、いつておひつ」

ちこやく、紫蘭、とつぶやくと彼はそ�だ、と頷いた。今までこのような過剰にスキンシップや言葉をかけられたことがないのに、これがしばらく続くのだろうか。嬉しいようななんとも複雑な気持ちになつた。

2・紫蘭との再会

紫蘭との再会の後、まずはお茶をとこう」となり、鈴音がこれまでから住む部屋に案内される。部屋につくまでの間、鈴音はすつと紫蘭の腕の中に入った。・・・正確には、いふように言われた、だが。おろして欲しい、ところのままでよ、と返事が返ってくるため一度ほどそのやつ取りをした後、諦めたのだった。

「ここが今日から鈴音が生活する部屋だ。気に入つたか？」

「わあ・・・す」「こーーーーーーーで今日から生活するのね。ありがとう、

紫蘭」

「なに、このくらこのこと。そなたの輝く笑顔を見るためなら、でもあんなことなりなんでもしてやる

緋色の瞳が柔らかく細められ、愛しげに見つめられて、あわてて俯く。頬に熱が集まるのがわかる。そんな風に熱い視線をおくれたら、どう返していいのかわからない。頬に両手をあてながら、鼓動が静まるのを待つ。

「もう。そんなこと言つて、私が無理なことつたらどうあるつむりなの？」

「叶えられるなら、叶える。だが、鈴音はそんな女性ではないこと、わかってる」

「あ、ありがと」「・・・」

嬉しい。齊蓮から聞いていふとはいえ、そこまで信頼してくれるとは。そこへ、今まで控えていた琉香が、花茶を持ってきた。花茶はもてなしのお茶で有名である。お茶の中で、少しづつ花が茶の中で開いていくのが有名だ。

「これが、花茶なのね。・・・うん、おいしいわ。これは、紫蘭が手配してくれたのかしら?」

「ああ。そなたを歓迎する、ということをわかつてもらいたくてな。茶でいい表せるわけではないが。改めて、李 齋蓮が養女、鈴音。そなたを正妃候補として、心より歓迎しよ!」

紫蘭は鈴音を見つめながら、艶然と微笑んだ。心臓が跳ねたのがわかる。紫蘭の微笑みは心臓に悪い、と思う。そんなこといつたら、何が待ってるかわからないから、いつてあげない。でも、彼の笑顔を近くでみれるのは、今私だけ・・・この幸せが長く続きますように。

2・紫蘭との再会（後書き）

王太子宮編にはいります。齊蓮様、いつ再登場にしようか。
頑張ります！

3・憩いのひと

2人きりで落ち着いたところで、王と王妃に挨拶しにいかなくてはいけない、と紫蘭に言われた。今日は疲れているため、明日の朝のことだった。未だかつてない経験に、会つてもいいのに、緊張してしまつ。それをみてとつた、紫蘭が意外な行動に出た。

「なにを思いふけつている？今、目の前には私がいるところに、他の者のことを考えているだろう？…面白くない」

「…だ、だからって、いきなり抱きしめて、ほおにキスはびっくりするよ。し、しちゃダメってことじゃなくて」

「私は、明日の謁見のことについて、考えてただけなのに…」

「そう気追うな。自然体の鈴音が、父王達も喜ばれる。そつだ、先にいつておくことがある。謁見で私の弟にあつことにもなるからな」

「弟…第2王子様？」

「そうだ。遙翔 という。今年11歳となつたところだ。今年1歳となつたところだ。まだやんちゃでな、こちらも少し手を焼くところだ」

仕方のないやつだ、と笑む彼の顔は親しいものだけにみせるもので、いかに遙翔王子を愛しているかが、わかるものだった。一体どんな王子なのか。私とは打ち解けてくれるのか。その時、紫蘭が席をつたので、服の裾をひいて引きとめた。

「どうしたの、紫蘭？どこかへ行くの？」

「ああ、すまない。これから、残っている仕事をせねばならん。王太子としての務めだ。そなたを正式な正妃とするための手続きも入っている。が、こちらにも少々難題があつてな…」

「難題？・・・ってなに？」

「手を焼く相手が一人いてな。相手の家柄が高い分、うかつな行動もできかねるし。知つておくべき権利があるから、教えておく。齊蓮と並び称する家格の家の、娘がいる。侑紗南という。年は15歳。近いうちに、あわせることになるだろう。そのため、候補という形をとつたのだ。・・・すまないな。すぐに戻る。夕食は共にしよう。それまで、べつひでいってくれ」

「そうこうと、憂いを含んだ目で鈴音をみつめ、そばまでくると抱きしめ、ぽんぽん、と幼子をあやすように頭をかるぐたたいてから、紫蘭は仕事へと向かっていった。

「・・・ライバル登場、つてことになるのよね？その子と争うつてこと？まだ私、陛下や王妃様にお会いもしていらないのに。大丈夫かなあ。うつん、紫蘭を信じよう。大丈夫よ、きっと」

うとうん、と納得して鈴音は紫蘭が帰るまでの時間つぶしを、どうしようかと思い悩んだ。

3・憩いのとき（後書き）

候補とした形の理由を書いてみました。これから大変そうです

4 思案の時間

紫蘭が帰るまでの間、どうするか？少し考えて、情報がやはり足りないと鈴音は思った。今は情報が欲しい。琉香に聞いてもよいのだが、齊蓮に聞いた方が多くの情報が入るかもしれない、と思い琉香にたずねることにした。

「琉香。齊蓮様は、どうされているかしら？お時間を取つていただきたいのだけれど。お聞きしたいことがあります」

「はい。すぐに手配いたしますが、旦那様にも時間の都合がござります。急ぎであれば、早馬がよづりますよ」

「そうね。お願いするわ、謁見の後鈴音がお会いしたいと伝言をお願い」

かしこまりました、と琉香は王太子宮の侍女に後を頼み早馬の手配にいった。その間、窓から王太子宮の外の景色を見てみる。思わず息をのんだ。

（大きい・・・齊蓮様の屋敷も大きいと思つけれど、それと比べても、いつも比べないくらいに大きい）

「いかがされましたか？ああ、王太子宮の外の景色にござりますね。ここからの景色は見ものだと以前、王宮勤めのものに聞いたことがござりますわ」「琉香。手配ができたのね、ありがとうございます。お返事はいつのひ、もらえるかしら？」

「そつでござりますね・・・今からだと夕食前か途中くらいには返事の早馬がくるでしょう。夕食までの間、いかが過ごされます？鈴音様」

「少し休むわ。・・・思いのほか、疲れてるのかもしないわ。気

が抜けたみたい。一時間ほどしたり起^はじしてられる?」

「じゆるりと、お休みくださいませ」

返事を聞いてからベッドに向かい、ゆっくりと体を横たえる。すぐに睡魔が襲つてきてまぶたが落ちていく。鈴音は睡眠りの世界の住民となつた。自分が思つたより、疲れていたのか、一時間たつても鈴音は起きようとした。琉香が起^はりますも、起きる気配はなく。それから30分ほどしてから、鈴音は再び田原めたのだった。気がだるげにベッドから身を起こす。

「う・・・ねはよつ、琉香。こま、何時?」

お田原めにござりますね。よう眠られておいででしたよ。もう、紫蘭様とのご夕食の時間にござります

「えー? ほんと? ? ? ?」

その一言で一気に田原が覚めた。鈴音のその様子に、琉香がくすぐると笑う。それをみて、まだ夕食まで時間があることに気づく。

「もひ、琉香つたら。まだ時間あるじゃないのよ」

「ふふつ。申し訳ありません、鈴音様。正確には、あと一時間ござります。それまでに湯あみをして、お召しかえをいたしましょう」「そうするわ。衣装は、控えめなものにしてね。来るときは少し華やかに感じたから」

「では、そのように。もう湯あみの準備はできござります。こちらへどうぞ」

琉香の先導のもと、湯あみ処へいき丁寧に体を洗われる。これは、琉香だけでなく、王太子宮の鈴音つきの侍女たちも手伝つ。こちらの世界にきてしばらくなは、自分で体べらじ洗える、と抵抗したものだが、それが彼女たちの仕事なのだ、とわかるとそのうち抵抗もし

なくなつていつた。恥ずかしいのには、変わりないが。。。そうして、香油のマッサージを終え、今度はクリーム色っぽい衣装に身を包む。優しい印象を伝える色合つだ。

「これなら、大丈夫ね」

「お似合つにござりますよ。それでは、ご夕食の方は別のお部屋に用意してござりますので、向かいましょうか」

「そうね、遅刻はしたくないし。紫蘭が先についてたらいけないし、向かいましょう」

鈴音は、琉香を連れ、「食事の間」に向かつたのだった。

5・紫蘭の事情

「食事の間」につくと、まだ紫蘭はきていなかつた。まだ仕事がおしてゐるのだから。鈴音は着席し、紫蘭を待つこととした。

「鈴音様。食前酒の方はいかがなさいますか？桃酒のかるいものにいざいます。うかがつてから、いじ用意の方をthoughtして」

「いただくわ。ありがとう。・・・あなたの名前は？」

「董^{ほたる}様にいざります、鈴音様。以後、お見知りおきくださいませ

董と名乗つた女性は、鈴音より2・3歳年上のようだつた。長い髪を高く結い上げ、凛とした瞳は、意思の強さをつかがわせた。考えていると、視線が合ひにっこりと微笑まれる。そのとき、紫蘭の訪れを知らせる声が響き渡つた。鈴音が視線をむけると、紫蘭がややあわてた様子で、席に向かい着席した。

「待たせてすまなかつたな。会議が長引いてしまつた、許してほしい

「いいえ。仕事はきちんとこなすべきよ。でも、ありがとうございます。急いできてくれたのね、嬉しいわ」

「ああ。まず、食事にしよう。話は食べながらといふことではな。董、食事の用意を」

「かしこまりましていざります。食前酒は、本日桃酒となつております

「ああ、頼む」

董が後ろ女間に田配せをすると、料理が続々と運ばれてきた。斎蓮の屋敷で多少、慣れているとは思つたけれど、料理の数やそれを運ぶ人数はやはり、王太子宮のほうが多くて目をぱぱぱりとしてしま

つた。

「まずは、乾杯の方を。初めての食事に、乾杯！」

「乾杯！よろしくお願ひします」

席が離れているため、お互い杯を掲げて乾杯したあと、飲みほす。かるいもの、と聞いていたが思いのほか度数が高く、せき込んでしまう。大丈夫か、と心配げにきかれ若干涙目になりつつ、大丈夫と答える。どうも、日本の尺度ではかつたのがいけなかつたらしい。

「食事を共に、と言つたのだが、もちろん初めてここへきたというのもある。これからも共に食事をと思っているが、聞きたいことがあるだろ？と思つてな。すでに、齊蓮にも早馬を飛ばしたそうではないか？」

「ええ、そう。齊蓮様にも聞きたいことがあつたし。紫蘭にもよ。あなたからじやないと聞けないことも、あるはずよ。そうでしょう、紫蘭？」

「わかつてゐる。まずは、軽く食事といつて。空腹では、まわる頭もまわらぬぞ？」

それもそつだ、と思い首を縦に振り、同意の意を示す。そのあとは、静かに食事を勧めていく。お互い無言も変だと思つていた矢先、琉香が鈴音の後ろに控え、報告する。

「お食事中のところ、大変失礼致します。旦那様よりの伝言ござります。謁見のあと、控えの間にて会い、話をしようとのことござこます。では、失礼します」

ありがとう、と礼を述べ、紫蘭に視線を向ける。待つていたかのように、紫蘭はこちらをじつと見つめていた。真剣ともいえる視線が、

目があつたとたん、ふつと柔らかな視線にかわる。緋色の瞳が柔らかくなるときが、鈴音は好きだと思った。彼の表情で一番好きと言えるかもしない。

「時間がとれたようで、よかつた。あやつも、最近は仕事に忙殺されていてな。私でさえなかなか会えぬのだ。・・・さて、私からの話なのだが、よいか？」

「ええ。一番聞きたいのは、あなたからだから。話して、紫蘭」

かちや、とどちらからともなく箸をおき、見つめあう。

「別れ際に話した、侑家のことだ。私がそなたを話を斎蓮からきくまでは、家柄や表向きの評判から、侑家の紗南が正妃候補の第一にあがっていた。だが、私も父王も侑家をこれ以上のさばらせる気はない。私が将来、王になつたときに隣にたつのが、侑家であつてはならないのだ。そこで、信頼のおける李 齊蓮のもとに異国の中のが世話になつているときいてな。噂だけでは心もとない。斎蓮から話を聞いてみたのだ。そして、そなたに会いにいった」

そこまで話した後、紫蘭は鈴音を正面から見つめた。自分の探すべきものがみつかつた、というような嬉しげな感情をこめて見つめたのだ。思わず、胸に手をやつた。熱い視線に、体が少しづつ熱くなる感じがした。

5・紫蘭の事情（後書き）

想が叶わなかったので、ここに記します

6・不安と甘酸っぱさ

「最初の反応で決めようと思つた。どんな人間か、第一印象が大事だからな。そして、そなたは私に期待にこたえる形となつた - この娘なら、と思つたのだ」

それが、正妃候補とした理由？ 侑家に対抗するための？ それとも、他にも・・・？」

「それだけなのか、と思つたか？ 他にもある。侑家の他にも、有力貴族たちが自分の娘を正妃にとその座を狙つている。家柄だけが良い娘たちばかりだ。そのような家の娘をあげても、父親が外戚として力をつけ、発言権が増すばかり。国事にまで、口出しされるようなことがあつてはならぬのだ。わかるな？」

「ええ、多少政治の世界はわかるつもりよ。そのために、家柄と機転のきく娘がほしかった、というわけね？」

「それが大きいだろう。だが、それだけの娘なら探せばいるだろ？ 私は、鈴音だからこそ、そばにいてほしいと思つている」

- 私だからこそ、そばに？ その意味は、どうとればいいの？ 勘違いしちゃうよ、紫蘭。もしかしたら、帰れるかもしない日本。帰れるかも、といつ、一縷いぢる の望みを持つてゐのに、違う望みを持つてしまつたらそのとき、私はどうしたらいいの・・・

「どうかしたか、鈴音？ 気分でも悪いのか？ すまない、話を詰め込みすぎたか。今日はここまでとしよう、ゆっくり休むがいい。・・・不安に思うことがあるなら、相談くらいはしてくれ。そうしてもらえると、嬉しい」

「ありがとう、紫蘭。お言葉に甘えて、機会があれば相談させても

「うわね。今日は、一緒に食事ができてよかったです。それじゃあ

「鈴音、じゅりをむいてほしい」

「え？」

紫蘭に背を向けかけた鈴音だったが、声をかけられふりむくと、頬に手をあてられちいさく額に口づけられた。くす、と笑みがこぼれる。不安がよぎった心を、彼はよんだのだろうか？小さな気遣いが、すこしづつ心中に沁みわたっていき、大きくなつていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705y/>

夢想花

2011年11月24日22時50分発行